

# ニッポン ドクター和の 臨終図巻



私が在宅医療に従事して、はや23年以上が経ちました。在宅医は2つに分類されると感じます。

「在宅医療」という言葉が生まれて以降に医者になった方と、そんな言葉がなかった時代、外来に来られなくなった患者さんの自宅に行き、看取りまで行ううちに気が付けば「在宅医」と呼ばれるようになっていた方です。

私は後者の人間です。昔の町医者は、考えてみれば皆、在宅医だったはず。「ばあちゃんの具合が悪いので来て欲しい」とドアを叩かれるまま、往診していたのです。1976年に病院死が在宅死を上回り、2

## 57 早川一光 医師

長尾和宏（ながお・かずひろ）  
医学博士・東京都立第二医科大学卒業後、大阪府第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を旨とする。近著「痛くない死に方」は、関西国際大学客員教授。

005年には8割超の人が病院死する時代となって、在宅医療は特殊な医療のように思われる存在になりました。

そんな在宅医療の先駆者であり、尊敬する大先輩だった早川一光（かずてる）さんが、6月2日に亡くなりました。享年94。14年から、多発性骨髄腫で闘病生活をおくられていました。大先輩の葬儀に駆けつけたと思います。本人の遺志



早川一光さん（提供写真）

# 「在宅医」とは…大切な何かを問い、旅立つ

で葬儀・告別式は行わないとのことでした。

早川先生は1924（大正13）年、満州生まれ。父親は満鉄病院で医師をしていたといえます。京都府立医科大学で医療を学びました。終戦直後で医療環境の恵まれない時代、西陣の住民が出資した診療所の医師となりました。

それから半世紀以上にわたって、自分の身体は自分で守ろう」をモットーに地域医療に進（まいしん）。認知症でもがんでも、自宅の畳の上で死んでもらいたいと町を回り続け、「わらじ医者」の愛称で地元の人から愛され続けました。

在宅医療こそが最高の医療、と言いつづけた人生でしたが、自分が患者になってから、その思いは少しずつ変わっていききました。

昨今の在宅医療があまりにもシステムティックで「こんなはずではなかった」と発言をし始めたので、来てほしいときに医者

が来てくれるのが在宅医療の根幹のようですが、「2週間に1回来るからそれ以外はあまり連絡をよこすな」とまで言う在宅医がいる、と。

くしくも私は、同じタイミングで在宅医の質の格差に疑問を抱き、『痛い在宅医』という本を出版し、問題提起をしたところでした。

現在、在宅医は特殊な領域です。さまざまな事情のあるご家庭にお邪魔して、病気だけでなく人間や生活を丸ごと診なければ良い在宅医療を提供できません。「人間」が好きでなければ、できない仕事です。

しかし、国はそんな原点はともかく在宅医の数を増やそうと躍起になっている。大切な何かを忘れ去れかけている…多くの後輩に、辛辣（しんらつ）なメッセージを残された早川先生。それでも最期は、ご自宅で旅立たれたようです。

私は今、背筋を正して早川先生の本を再読しているところで